

# 一番茶の米国輸出を可能とするIPM体系

## [研究のねらい]

・海外では抹茶などの需要が高まっており、本県においても輸出用の茶生産への取り組みが増加している。しかし、茶の輸出にあたっては輸出相手国の残留農薬基準値(MRL)をクリアーする必要があり、大きな障壁となっている。そこで、主に米国輸出を可能とするIPM体系を構築するとともに、現地実証試験によりその実用性を検証した。

## [研究の成果]

- ・ハマキガ類の交信攪乱剤であるロープ状ハマキコン-Nと選択性殺虫剤を組み合わせ、主に米国MRLに対応できるIPM体系を構築(表1)し、2016年~2018年に静岡県の4地区(菊川、小笠、浜岡及び掛川)において現地実証試験を行った。
- ・ロープ状ハマキコン-Nは、平坦地ではハマキガ類に第3世代まで交信攪乱効果を示し、実用性が確認された。ただし、平坦地でも崖に隣接した茶園や急傾斜地茶園では交信攪乱効果が不安定になるため不適と考えられた。
- ・1年目及び2年目の実証試験を経てIPM体系の改良を重ねた結果、3年目の実証区では問題となるような病害虫の被害はなかった。なお、1年目及び2年目の試験で米国MRLが取得されているピレスロイド剤を防除体系に組み込んだ際には、カンザワハダニやクワシロカイガラムシのリサージェンス(誘導多発生)が一部で確認されたことから、使用は避ける必要がある。
- ・実証区の荒茶検について農薬残留分析を実施した結果、3年目の一番茶では全検体が米国MRLをクリアーし、本IPM体系の実用性が確認された。さらに、3年目の一番茶では同様に全検体が台湾MRLをクリアーしたことから、本IPM体系は台湾輸出にも対応できる可能性が示唆された。
- ・実証区では慣行区よりも農薬散布回数が概ね少なく、農薬散布コストが削減された。

表1 一番茶の米国輸出を可能とするロープ状ハマキコン-Nを基幹としたIPM体系

防除時期	主要な対象病害虫名	薬剤名(商品名)	希釈倍率	摘採前日数	使用回数	MRL(ppm)				備考
						日本	米国	EU	台湾	
1~2月	クワシロカイガラムシ	ブルートMC	1000	30	1	15	15	15	5	
2月	チャトゲコナジミ	アタックオイル	50	使用方法確認		除外	除外	除外	除外	
3月中旬 <small>いずれか 選択</small>	カンザワハダニ	バロックフロアブル	2000	14	1	15	15	15	5	※チャトゲ防除不要
	カンザワハダニ、チャトゲコナジミ	ダニゲッターフロアブル	2000	7	1	30	40	50	(0.01)	※チャトゲ防除必要
一番茶生育期	コミカンアブラムシ	スタークル顆粒水和剤	2000	7	2	25	50	(0.01)	10	
一番茶摘採										
一番茶摘採後	カンザワハダニ	アグリメック	1000	7	1	1	0.01	0.02	0.1	
5月下旬	ハマキガ	ロープ状ハマキコン-N	50m/10a			除外	除外	除外	除外	
二番茶生育期	チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャトゲコナジミ	ハチハチ乳剤	1000	14	1	20	30	(0.01)	10	
	炭疽病、もち病	コサイド3000	1000	14	—	除外	除外	40	除外	
二番茶摘採										
二番茶摘採後	炭疽病	摘採面の浅刈り								
三番茶萌芽~開葉期 <small>いずれか 選択</small>	チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ	ウララDF	1000	7	1	40	40	0.05	5	
	炭疽病、新梢枯死症	アミスター-20フロアブル	2000	14	1	10	20	0.1	5	※アミスター感受性
		カスミンボルドー	1000	30	1	カ:0.2 銅:除外	(0.01) 除外	(0.01) 40	0.04 除外	※アミスター耐性
三番茶生育期	チャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、ハマキガ、ヨモギエダシヤク、チャトゲコナジミ	ディアナSC	2500	1	1	40	(0.01)	0.1	3	
8月上~中旬	ハマキガ、ヨモギエダシヤク	サムコルフロアブル10	2000	3	1	50	50	0.02	2	
秋芽萌芽~開葉期	チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノホコリダニ、チャトゲコナジミ	コテツフロアブル	2000	7	2	40	70	50	2	
	炭疽病	フロンサイドSC	2000	14	1	5	6	0.05	5	
秋冬番茶摘採										
散布回数	殺虫剤(ハマキコンは除く)	10								
	殺菌剤	3								
	計	13								